The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対立する国家の狭間で生きる移民女性たちのアイデンティティ分析ー在韓日本人女性たちの語りを通して見る日韓問題への関わり方ー
Author(s)	竹村, 博恵
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/91830
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（竹村博恵）	
論文題名	対立する国家の狭間で生きる移民女性たちのアイデンティティ分析 ―在韓日本人女性たちの語りを通して見る日韓問題への関わり方―

論文内容の要旨

本研究の目的は、韓国人男性と恋愛を経て国際結婚し韓国で日韓にルーツを持つ子どもを養育中の日本人女性たちが、日常生活の中で日韓問題と関連のある出来事に遭遇した際にどのような立ち位置からどのように目の前の事象と関わっているのか、またその際にどのような社会状況や関係性の中に身をおいているのかを明らかにすることである。

日韓の国際結婚というのは歴史的、社会的、政治的に複雑な関係性を持つ国の出身者同士が一つの家庭を築くという行為であるとともに、両国の間に存在する緊張感や葛藤が日常生活の中に常に介入してくるという点で大変独特な挑戦である。しかしながら、両国で発表された先行研究では在韓日本人女性たちの韓国生活に悪影響を与える要因として日韓問題の存在を指摘するに止まっており、それが具体的にどのような影響なのか、彼女たちがその問題とどのように向き合い関わっているのかに関する調査が不足している状況と言える。このような状況に鑑み、本研究では韓国人男性と恋愛結婚した在韓日本人女性を研究対象に定め、日韓の狭間で生きる彼女たちが日常生活に介入してくる日韓問題に起因する出来事に対しどのような立ち位置からどのように関わり合っているのかについてインタビュー調査を通じて明らかにした。また、インタビュー・データの分析に際してはインタビューを相互行為の場、インタビュー参与者を「関係的存在」として捉え、その中でなされる発言や語りをその内容だけでなくそれが表出・構築されるに至ったプロセスの両方から検証した。具体的には、１）ナラティブ領域とそれが語られる相互行為の場において彼女たちが自らをどのように置付けているのか、２）語ることを通して表出・構築される彼女たちのアイデンティティとはどのようなものか、という2つのリサーチ・クエスチョンについて明らかにし、その結果に基づいて３）彼女たちは日常生活に介入してくる日韓問題を周囲との関係性の中でどのように受け止め関わっているのか、という3つ目のリサーチ・クエスチョンへの回答を試みた。

その結果、第7章の韓国（人）との関わり合いに見る日韓問題では、彼女たちが韓国（人）との間でこの話題を扱う際には、日本人アイデンティティや感情が前景化するもののマイノリティな存在として韓国社会を無難に生き抜くことをより優先し、マジョリティである韓国人の意見に反発せず受け入れる・受け流すという関わり方を選択していることが明らかとなった。第8章の日本（人）との関わり合いに見る日韓問題では、彼女たちが日本（人）との間でこの話題を扱う際には、韓国に関わりのあるものというアイデンティティからこの話題を通じて日本人が提示する偏った韓国（人）イメージに対し直接的な抵抗の姿勢や反論を提示するという関わり方をしていることが明らかとなった。そして、データ内で提示された彼女たちの発言からは、彼女たちが抵抗や反論を示す理由として、自分自身や自分自身を取り巻く人々、環境を日本側の人々に正しく理解してもらいたいという共通した思いが存在していることも明らかとなった。第9章の韓国(人)・日本(人)との関わり合いに見る日韓問題では、彼女たちが自分たちの日韓両国（民）と関わりがあるものという位置付けを逆手に取り、日本（人）と韓国（人）の双方に対し批判的な視線を向けながら日韓問題に関する話題に関わっていることが明らかとなった。第10章の韓国人の夫との関わり合いに見る日韓問題では、彼女たちが韓国人の夫との間で日韓問題に関する話題を扱う際に、夫と話をする場合では日韓両国に関わりのあるものという位置付けから韓国側の主張にも耳を傾ける姿勢を持って関わる、夫と話をしない場合では日本人代表として韓国人の夫に勝つことを目指して関わるという関わり方をそれぞれ選択していることが明らかとなった。第11章の日韓にルーツを持つ我が子との関わり合いに見る日韓問題では、彼女たちが日韓にルーツを持つ子どもとの間で日韓問題に関する話題を扱う際には日本人母や日本人として子どもと向き合っていること、またその際には韓国の支配的言説の影響で子どもの日本人としての側面が傷つくことがないよう言説が拡散する偏った日本（人）イメージに対し直接抵抗するという関わり方をしていることが明らかとなった。第12章の自分自身との関わり合いに見る日韓問題では、彼女たちが自分自身との間で日韓問題に関する話題と関わる際に、少しでも韓国生活を精神的に安定して気持ちよく過ごすためにはどうすれば良いかという観点から戦略的に関わり方を決定していることが明らかとなった。ここから

は、日韓問題に関する知識を身につける・身につけないの選択が、彼女たちの個人の努力や怠慢とは関係なく外的要因との関連性で決定されている可能性も示唆された。

第7章から第12章までの結果を通じて見えてくるのは、行為体としての在韓日本人女性たちが日韓両国に対し否定的な発言をする個人に対してではなく、日韓双方の人々の中に偏った韓国（人）・日本（人）イメージを構築する支配的言説に対して抵抗する姿勢を見せているという実態である。また、抵抗の際には、彼女たちの言葉に耳を傾ける韓国人の夫、日本の家族や友人・知人に対しては直接接触をした経験もないのにどうして相手を非難することができるのかというロジックを、日韓にルーツを持つ我が子に対しては昔の日本人と今の日本人は同じなのかというロジックを抵抗の切り札として提示していることがわかった。そして、両方のケースに共通して、そのようなロジックを提示して抵抗を示す目的が相手の中に存在する偏った韓国（人）・日本（人）イメージを撹乱するためであることも明らかとなった。彼女たちの撹乱の試みは、対日本人に対しては効力を見せなかったものの、韓国人の夫や日韓にルーツを持つ子どもに対しては一定の効果を生じさせる可能性を見せていた。彼女たちは自分たちが抵抗する理由について、対日本人の場合は自分が関わりを持つ韓国（人）と韓国で生活している自分自身のことを理解してほしい、対韓国人の夫の場合は日本人代表・韓国人代表ではなく両国に関わりのあるものとして向き合いたい、互いのことをより理解したい、対日韓にルーツを持つ我が子の場合は日本（人）を自分の目で見て理解してほしい、自分の一部分も含め日本（人）を嫌わないでほしいという思いを吐露していた。このような日韓問題に関する話題に対する彼女たちの関わり方の特徴からは、彼女たちを取り巻く人々との間で日韓問題に関する話題を扱った際に彼女たちが陥る特殊な状況が理解できる。つまり、この話題を巡って彼女たちが韓国人・日本人・日韓にルーツを持つ子どもたちと向き合った際には、彼女たちを取り巻く人々の目に双方の国（民）の否定的な側面しか目に入らない状況が生じているのである。そして、彼女たち自身もそのような否定的な相手と関わりを持つものや、否定的な相手そのもののように認識されてしまうのである。そのような状況は、裏を返せば韓国（人）と関わりを持つ中で自身が構築した関係性や身を置く状況に愛着を感じるようになっている彼女たちの側面や、自分自身や子どものルーツでもある日本（人）に愛着を感じる彼女たちの側面を飲み込み、まるで存在しないものとして隠してしまうような状況でもあると言える。実際、彼女たちはデータ内で「韓国人と結婚した私を認めてほしい」、「韓国で生活する私を無駄に心配しないでほしい」「自分や自分の家族のために韓国（人）に対する誤解を解きたい」といった発言をしているが、この話題を巡って彼女たちが身を置く状況と彼女たちの発言を考慮すれば、抵抗する行為体としての彼女たちが彼女たちの一部分を無視する相手に対し私の存在を認めてほしい、無かったことにしないでほしいと訴えている様子が見えてくる。また、抵抗の際に彼女たちが提示するロジックからは、自分たちが相手を非難したり日本人を一括りにして悪い人と表象したりする際に根拠としている情報に今一度向き合ってほしい、その情報を通じてあなたが見ている存在は本当に実在している存在と結びつけることができるのか今一度考えてほしいと、双方の国の人々に対し訴える声が聞こえてくる。ここからは、彼女たちが支配的言説の影響により両国の人々が幻想の韓国（人）・日本（人）の存在に拘束され、その中で互いを非難しあっていると認識していることが理解できる。本研究のデータ内で観察された彼女たちの撹乱には、相手の中の規範的意識や認識の枠組みを鮮やかに変化させるような力はなかったかもしれない。ただ、本研究の結果を通じて見えてきた彼女たちとこの話題との関わり方からは、この話題を巡って大切な人々から自分が愛着を感じているものを否定されるとともに、そのような言動をとる相手に対しての愛着もなかったかのように扱われる彼女たちの姿が見えてくる。そして、彼女たち自身が自分たちをそのような状況に陥らせる要因として、日韓問題に関連して双方の国（民）に対し否定的なイメージを構築する両国の支配的言説の存在を指摘し、その存在に強い警戒心を抱いていることも明らかとなった。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　竹村　博恵　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	秦　かおり
	副 査	教授	植田　晃次
	副 査	教授	森　祐司

論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国人男性と恋愛結婚をして韓国で暮らす日本人女性に焦点をあて、日本と韓国という政治的歴史的に軋轢のある両国の狭間で、夫との関係、子供の養育方針などを巡ってさまざま出来事に遭遇する日本人女性がどのように日常を紡いでいるかを談話分析の手法を用いて分析したものである。

本論文は12章から成る。第1章は序論と論文の構成について触れ、第2章では先行研究を概観している。日韓の国際結婚には、歴史的に見て4つのケースが存在する。1つ目は第二次世界大戦後に朝鮮が独立するまでの35年間に行われた「内鮮結婚」、2つ目は特定の宗教を介した国際結婚、3つ目は1965年の日韓国交回復後の駐在員や政府関係職員、研究者、留学生と現地の韓国人との間で生じた国際結婚、4つ目は「文化交流型」の国際結婚である。本論文が焦点を当てるのは、この４番目の「文化交流型」結婚である。この章においては、韓国生活への適応、夫婦関係、子供の養育、日韓問題と先行研究をわけて概観し、先行研究における問題点を指摘した上で本研究の新規性を明瞭にしている。

第3章では、本研究の目的と課題を述べている。本研究の目的は、韓国人男性と恋愛を経て国際結婚し韓国で日韓にルーツを持つ子どもを養育中の日本人女性たちが、日常生活の中で日韓問題と関連のある出来事に遭遇した際にどのような立ち位置からどのように目の前の事象と関わっているのか、またその際にどのような社会状況や関係性の中に身をおいているのかを明らかにすることであるとしている。第4章では分析の枠組みを提示している。まず、竹村氏自身が日韓にルーツを持つ子女を韓国で養育しているため、本研究は当事者研究としての視座が必要であり、その枠組みを先行研究を交えながら説明している。さらに本研究では、Butlerの「行為体（agency）」の概念を採用し、「言語を使用して何かの効果を生み出す存在」としての彼女らを分析している。その他、ナラティブとアイデンティティについて本研究としての定義を行い、第5章ではそれを遂行するための調査枠組みと調査対象者について、第6章では分析手法であるスモール・ストーリ理論とポジショニング理論が続く。

第7章から第12章まではテーマ別の分析となっている。第7章では韓国（人）との関わり合いの中で浮上する日韓問題の影響について、在韓日本人として難しい立場に置かれている彼女たちの日常を詳察する。第8章では逆に日本（人）との関わり合いに見る日韓問題について、日本人の韓国批判については反感を覚えずにはいられない彼女たちの様子が映し出され、第7章と第8章、さらに日韓双方を論じている第9章を掛け合わせると、どちらにも軸足が置けない存在としてアイデンティティを保っていることがわかる。第10章では韓国人の夫との関わり合いを分析しているが、興味深いことに、日韓問題について夫と話し合う夫婦と話し合わない夫婦があることが分かり、日韓問題については夫との軋轢が生まれないように工夫しながら過ごす彼女たちの様子がわかった。さらに、第11章では日韓にルーツを持つ我が子との関わり合いについて、韓国で反日的な教育を受ける子供とどう関わるべきか苦慮している様子が観察された。第12章ではそれらを踏まえた自分自身をどう位置づけるかを論じている。

第13章では総合考察として、リサーチクエスチョンに解答したあと、Butlerの「行為体」、「主体化」、「服従化」、「撹乱」の概念に基づきながら日韓両国において双方の国の人々、韓国人の夫、日韓にルーツを持つ我が子、自分自身との間で日韓問題に関する話題を扱っている在韓日本人女性たちが身を置く社会状況と関係性、そしてそこに響く彼女たちの声について考察している。その内容から、行為体としての在韓日本人女性たちが日韓両国に対し否定的な発言をする個人に対してではなく、日韓双方の人々の中に偏った韓国（人）・日本（人）イメージを構築する支配的言説に対して有言無言の抵抗を行う実態が観察された。

以上のように、本研究は、対立し合う両国（民）と関わりを持つ人々が、その狭間で人間関係の構築や自身が生活する社会状況を調整していかなければいけないことを示している。これは現在戦争状態にある国など異なりや争いの種を内包する関係性において、人々が少しでも精神的に安定し穏やかに自身が身を置く場所で生きていくためにはどうすれば良いのか、それを周りの人々にどのように伝えていけばいいのかを考える契機として大変価値が高いものである。また、394ページと大作ではあるがよく練られた分かりやすい筆致であること、国際結婚についての研究で実際の談話をこれほど多くの側面から研究したものは希少であり、本研究は学術的に貢献度の高いものと判断できる。

課題として、先行研究をやや無批判に援用するきらいがあること、またディアスポラの理論など、さらに取り入れるべき理論もあったことなどが挙げられる。これらについては今後の更なる研究の発展を期待するものである。

以上のような理由で、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。